●せいてん質問箱

弥陀一仏への信仰は、お釈迦さまをなおざりにすることになるのでは？

●質問● 浄土真宗は、阿弥陀さま一仏への信仰といいますが、それでは、仏教を説いてくださったお釈迦さまをなおざりにすることにはならないのでしょうか。

仏教は釈迦の教えであり、阿弥陀仏はその釈迦の経説の中にあらわれる仏です。両者の関係は、釈迦はこの娑婆世界において阿弥陀仏の法を説く仏であり、阿弥陀仏は釈迦によってその法が明らかにされる仏という関係にあります。ですから一般に弥陀・釈迦二尊について論じるときには、まず釈迦をあげ、その後に阿弥陀仏を出すか、あるいはそれぞれ諸仏の中の一仏として、並列的に説かれる場合が多くみられます。善導大師の『観経疏』「玄義分」（「証巻引用」、三一二頁）にも、

仰いで惟みれば、釈迦はこの方より発遣し、弥陀はすなはちかの国より来迎す。かしこに喚びここに遣はす。あに去かざるべけんやとあって、釈迦はこの娑婆世界から阿弥陀仏の浄土へ往くようにとお勧めになり（発遣）、阿弥陀仏は浄土から、来れと迎えてくださっている（招喚）、と示しています。つまり、二尊の関係は、釈迦の発遣に対応する弥陀の招喚という関係で、順番も常に釈迦・弥陀の順になっています。

ところが、親鸞聖人の場合、ほとんどが弥陀・釈迦の順になっています。たとえば「正信念仏偈」の前半、つまり弥陀の本願と釈尊の経説について述べる依経段をみますと、最初に阿弥陀仏が本願を建立されるに到った事情と本願の成就されたことが説かれ、その後に、

如来、世に興出したまふゆゑは、ただ弥陀の本願海を説かんとなり（二〇三頁）

とあって、釈迦如来は阿弥陀仏の成就された本願を説くために出世されたのである、と説かれています。「玄義分」に見られるような、釈迦の発遣に対応する弥陀の招喚という関係で示されるのではありません。ここではまず弥陀があって、その教えを釈迦が説くという順になっています。

また『教行信証』「教巻」で、『大経』の大意を述べる一段も、「正信念仏偈」と同様の説き方になっています。まず、

この経の大意は、弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功徳の宝を施することを致す（一三五頁）

と、阿弥陀仏の発願とその成就を示し、それを承けて、

釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲すなり（同頁）

と、釈尊出世の本懐、つまり釈迦仏は弥陀の本願を説かんがためにこの世界にお出ましになったと、示しておられます。ここでも「正信念仏偈」の場合と同様、弥陀があって釈迦がその法を説くという順になっています。

それでは何故、親鸞聖人は弥陀・釈迦という順番に説いておられるのでしょうか。『歎異抄』第二章には、

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず（八三三頁）

とあります。親鸞聖人は、弥陀の本願が真実であるから、それを説き示してくださった釈迦の経説がいつわりであるはずがないと述べられています。常識的には、釈迦が説くから弥陀の本願も真実であるということになるのでしょうが、聖人の考え方はそれとは逆になっています。これからも分かるように、親鸞聖人においては、何よりもまず弥陀の本願こそが真実であり、弥陀の本願を説いてこそ釈迦出世の意味があったのです。ですから聖人は弥陀・釈迦という順に述べられるのです。親鸞聖人は前述の「正信念仏偈」の文を釈して、

諸仏の世に出でたまふ本懐は、ひとへに弥陀の願海一乗のみのりを説かんとなり（『尊号真像銘文』、六七一頁）

と示され、諸仏の出世本懐も弥陀の本願を説くことにあったと見ておられます。

また『浄土和讃』の「諸経讃」には、次のような和讃があります。

久遠実成阿弥陀仏
五濁の凡愚をあはれみて
釈迦牟尼仏としめしてぞ
迦耶城には応現する
（五七二頁）

久遠の昔に仏となられた阿弥陀仏は、五濁の愚かな凡夫をあわれみたまい、阿弥陀仏の本願を説くために釈迦仏としてこの世界に現れ、迦耶城にその姿をあらわされたのである、とあります。釈迦はこの娑婆世界において弥陀法を説く教主であるとともに、阿弥陀仏がこの娑婆世界に姿を現した仏でもあったのです。

こうした親鸞聖人の弥陀・釈迦二尊観をうかがうとき、私たちは、弥陀一仏に帰依し、釈迦仏が出世の本懐とされた弥陀の本願を戴くことこそが、釈迦仏の本意に叶うことになり、釈迦仏を敬うことになると思われます。

（龍谷大学講師　普賢保之）